

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 宇佐美洋
著『「非母語話者の日本語」は、どのように評価されているか
評価プロセスの多様性をとらえることの意義』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇佐美, 洋 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000776

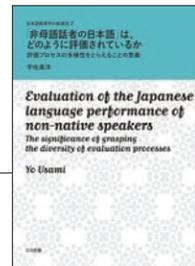
宇佐美洋 著

『「非母語話者の日本語」は、どのように評価されているか

評価プロセスの多様性をとらえることの意義』

日本語教育学の新潮流 7

2014年2月 ココ出版 A5判 392ページ 4,000円+税



宇佐美 洋

本書は、筆者が2012年に名古屋外国語大学大学院に提出した博士論文『学習者の日本語書きことばに対する母語話者評価の多様性に関する研究—謝罪文を対象とした「評価プロセスモデル」の構築—』に加筆修正を施し、書籍として刊行したものである。本書はまた、筆者が2006年以降続けてきた一連の評価研究にひとまずの区切りをつけるものであるとともに、本書において提示した評価研究の基本理念は、国立国語研究所共同研究プロジェクトである「コミュニケーションのための言語と教育の研究」を支える理論的支柱のひとつとして、さらに数多くの共同研究を生み出すための推進力ともなっている。

本書の構成は以下の通りである。

- 第1章 序論
- 第2章 先行研究
- 第3章 作文データ収集と、予備調査としての質的調査
- 第4章 評価観点を探る量的調査と、評価者グルーピング
- 第5章 質的調査概要
- 第6章 評価プロセスのプロトコル分析（コード設定）
- 第7章 評価プロセスのプロトコル分析（コード集計）
- 第8章 PAC分析による、個人の評価プロセスの掘り下げ
- 第9章 評価プロセスモデル論
- 第10章 総括と今後の課題

第9章で言及した「評価プロセスモデル」については、すでに『国語研プロジェクトレビュー』第3巻第3号に掲載された記事「言語運用評価プロセスの多様性と普遍性をとらえる」(pp. 125-132, <http://www.ninjal.ac.jp/publication/review/0303/pdf/NINJAL-PReview030304.pdf>)において紹介されているので、そちらを参照されたい。ここでは改めて、本書および筆者が推進する評価研究の社会的意義について述べる。

従来「非母語話者の日本語」とは、言語能力上特権的な地位にある（と自ら考えている）母語話者により、一方的に評価を受ける対象であった。日本語教育分野においては、非母語話者の日本語表現のうち、「母語話者によって低く評価されてしまう表現（カチンとくる表現）」とはどのようなものかを明らかにしようとする研究が行われ、非母語話者がそのような表現を取らないように、という配慮の下、シラバスやカリキュラムが組み立てられてきた。

筆者の評価研究は、このような考え方や方法論に対する根源的な疑問に端を発している。母語話者が持つ価値観に、非母語話者は一方的に合わせなければならないのか。母語話者の判断というものが、果たしてそんなに特権的な地位を持ち得るものなのか。そもそも、同じ「日本語母語話者」であってもその評価のあり方は千差万別であるはずであり、一般化された「母語話者評価」なるものを想定することにどの程度の意味があるのか。

本書では、日本語非母語話者が書いた「謝罪文」を母語話者が評価する際、その評価の観点やプロセス、またその背後にある価値観がいかに多様であるかということ、量的・質的双方の手法によって示した。また、評価プロセスの多様性の中にも一定の普遍性を見出すことができることを示し、多様性と普遍性をともに説明するための「評価プロセスモデル」を提案した。

こうしたモデルの提示は、学術的理論研究として位置づけることができるが、本書の研究は単なる学術研究の領域にとどまるものではない。本書の研究が最終的に目指すことは、「評価」という行為に対する根源的な問い直しを促し、それによって異なる価値観に対し寛容な社会を形成していくことである。

母語話者は非母語話者に相対するとき、無意識のうちに自らが「特権の評価者」として、一段高みに立ったような意識を持ってしまいがちになる。そして自らの価値観を、あたかも自明の存在であるかのように思い、他者の言語運用に対し一方的な価値づけを行ってしまう（そしてこのような「一方的価値づけ」は、母語話者が非母語話者に相対するときだけでなく、社会の中の様々な場所で行われてしまっているだろう）。

しかし、いかなる価値観にも「自明」ということはない。人の数だけ価値観は存在し、ある者にとっての「自明」は他の者にとっての「不可解」になり得る。

自らの価値観とは異なる価値観の存在を知り、それらにも自らの価値観と同等の存在価値があるのだということに気づくこと。多様な価値観が交錯する中で、自らの「評価」のあり方を問い直していけるようになること。さらに、他者の価値観を忖度してそれに合わせておく、というのではなく、いかに時間はかかろうとも、異なる価値観の存在を理解してもらうための丁寧な努力を続けていけること。それは、現代の多文化共生社会に生きる者すべてが身につけておくべき基本的素養であると言えるだろう。

「社会的評価リテラシー」とでも呼び得るこの種の基本的素養は、いかにして育成され得るか。それこそが、本書をはじめとする一連の評価研究の課題なのである。

宇佐美 洋 (うさみ・よう)

国立国語研究所日本語教育研究・情報センター准教授。博士（日本語学・日本語教育学）（名古屋外国語大学）。新潟大学専任講師、国立国語研究所研究員、同主任研究員、同グループ長を経て、2010年7月より現職。

主な著書・論文：「文章の評価観点に基づく評価者グルーピングの試み—学習者が書いた日本語手紙文を対象として—」（『日本語教育』147, 2010）、「実行頻度からみた「外国人が日本で行う行動」の再分類—「生活のための日本語」全国調査から—」（『日本語教育』144, 2010）。

受賞：第9回奨励賞（日本語教育学会, 2011）、第6回林大記念論文賞（日本語教育学会, 2011）。

社会活動：日本語教育学会理事、同調査研究推進委員会委員、同教師研修委員会委員、社会言語科学会研究大会発表賞選考委員会委員。